

トピックス

1. 播州日誌「桜散る」

2. 南国土佐を後にして 第3回



福留経営労務管理事務所  
姫路龍馬会  
社会保険労務士・行政書士  
福留章

# 龍馬通信

No. 53

2022年5月号

## 初夏の憂うつ 立夏～小満の候

淡く優しい春からキラキラとした初夏へ。風さわやかに新緑の候、山々の緑が強く表情をひきしめる。凜とした空気が満ちて万物の新しい命が喜びの時を迎える。

桜が散り、つつじが満開となる。大振りの花びらがうち重なるようにして咲く。「つつじ」は庭に植える、常緑（落葉）低木。5月頃に赤、紫、白、ピンクがかった白など、多彩な花を開く。遠目には道端の垣根一杯に花が咲いて真ん中を歩くと花の回廊に入ったような気がする。公園は草花のことを知り尽くした庭師によって見る人を飽きさせない



ように次々と花が咲くように設計されている。ソメイヨシノなどの桜の後は八重桜、それが散りかけると一斉につつじが園庭を染めあげるように開花する。低い位置にはすみれ（バンジー）に負けないように紫蘭が清楚な風情をみせる。やがて紫陽花（アジサイ）が咲き始め夏になるとくちなしの花が芳香を放つ。ウォーキングコースにあたるおうちの庭でハナミズキが咲いているのを見た。アメリカ産の落葉高木花木とも書く。赤や白の4枚の苞（ほう）が花のように見える。薄紅色。上品で形が良い。次々と開花する花々は私たちを幸せにする。平和そのものである。今年の初夏は曇り空、どんよりと垂れ込めている憂うつがある。ロシアのウクライナ侵攻。狂気の侵略者が私たちの幸福を奪っている。

※苞（ほう）芽や花冠の下部に付く葉片

状のもの

立夏 5月5日 小満 5月21日

## 『龍馬と私』 ～ 龍馬伝説 ～

幕末を駆け抜けた坂本龍馬の名は、一部の人が知るのみで広く日本人が知るところではなかった。今や全国区であり、地元高知は何事においても龍馬さんを抜きに考えられない。圧倒的な人気はお湯が沸騰しているようなものである。私の事務所にも写真が2枚張り出されているし、住居にも龍馬の有名な彫像のレプリカが2つ3つある。龍馬ゆかりの地と言えば、長崎、鹿児島、山口、京都、そして北海道と幅広い。「龍馬伝説」というのがある。事の真偽は不明だが一応取り上げてみる。明治天皇の皇后である昭憲皇太后は一人の男の夢を見た。明治37年（1904年）2月6日、葉山御用邸で静養中のことである。その男は御座所の入口に平伏して言上した。「臣は維新前に国事のために身を挺した坂本龍馬と申す者です。海軍のことにつきましては、当時より熱心に心掛けておりました。この度、いよいよロシアとの戦争に入る暁には、自分は既に亡き身ではありますが、魂魄は日本の海軍に宿っておりますので忠義義烈なる我が軍人を保護いたす覚悟でございます。」皇太后

は不審に思って側近である田中光顕に「坂本龍馬とは何者か」とお尋ねになった。田中は龍馬の写真を取り寄せてお見せしたところ「まさしくこの男である。龍馬を追弔せよ。」と仰せになった。よくできた話だと思う。いくら龍馬命の私でもちょっと引いてしまうような話だが、まさに日露戦争勃発が間近に迫っていた時期。坂本龍馬の復権を願う侍臣田中光顕、皇太后丈夫の香川敬三らが日露戦争を前に日本海軍のヒーローとして、海軍を高揚させる為に仕掛けたのではないかという説がある。当たらずとも遠からず。しかしこのエピソードが「坂本龍馬」の名を全国区に押し上げたのは事実である。



昭憲皇太后

1849年～1914年

## 播州日誌

### 「桜散る」



花の命は短くはかない。その散り際の潔さが日本人の心にしみる。桜前線は東北から北海道へ。今年の開花は全国的に早く、穏やかな気候にも恵まれ、長い間、私達を楽しませいやしてくれた。しかしどうだろう。桜の美しさは年々変わらないはずなのに。

今年の桜、何となく色が薄く華やかさがなく、くすんで見えたのは私だけだろうか。個人的にはどうも気乗りがせず、花見気分には到底なり切れない。

心のどこかに、頭の片すみにどうしてもウクライナの惨状が影を落す。ロシアのウクライナ侵略が始まって早2カ月西側の武器援助もあり、祖国防衛に燃える兵士の戦闘意識は強く、徹底抗戦を続けている。しかし、その事はとりもなおさず戦争の長期化を意味しており、主要都市の大半がインフラを攻撃され壊滅状態。

両軍に多くの戦死者を生み市民の被害も甚大なものがある。極限状態の中で虐殺や性的被害の情報も流れており、私達の心を益々重いものになっている。マリウポリへの総攻撃。最後の砦と言われた製鉄所。シェルター仕様の要塞のような建物と地下壕。1,000人以上の市民と2,000人以上のウクライナ軍。そして500人程の負傷兵。そこへの総攻撃は、制圧を終えたとのプーチンの一言で中止された。又、彼はハエ一匹も通さない包囲網を命じた。これは、つまり兵糧攻めである。これ程、非人道的な戦略はない。

人々の口びるは乾き…涙は枯れることなく流れて悲しみに常にうるんでいる。

コンクリートを打ち砕く貫通弾での爆撃は止んだが、今度は厳しい飢餓との闘いである。水も食糧も薬もなく希望もない地下壕での生活は悲惨を極める。人々は息を殺してひそんでいる。「外へ出たい」「太陽を見たい」という子どもたちの悲鳴を私たちはどう聞いたらいいのだろうか。いくらウクライナの人々に寄り添うと言っても、私たちには何が出来るのだろうか。難民、被災民への救援活動に資金援助をする。ささやかでもその積み重ねや

世界的なロシア批判は何がしかの効果があるものと信じるほかない。戦争という現実に対して私たちにできることは限られている。しかしその力は微力ではあっても無力ではない。独裁者であるプーチンが言う偽りの平和が全くの偽善であり、戦争犯罪そのものであることを知らしめなければならない。第三次世界大戦への道を避け、核使用を絶対にさせないために私たちは団結し、粘り強く平和への道を探っていかなければならない。



桜は散った。来年の春にはまたその美しい姿を見せてくれるのだろう。その日が世界の人々にとって平和な世界であることを祈る。

2022. 4. 24

## 「 収束と終息 」

コロナ渦が続いている。オミクロンのA-B 2型への置き換わりが進む。オミクロン株の特徴である感染力は強いが重症化率は低いという情報は正しかったようで、最近のデータに反映している。感染症数はゆっくりとした下降を続けているが、まだかなりの数字が続いている。しかし感染が若い世代に多く無症状または軽症というケースが多い。病床使用率は20%台であり、医療体制は安定に向かっている。世界的な流れは2年数か月を経過した今、感染者数の状況からみてコロナは収束に向かうのではとされている。では終息はあり得るのだろうか。専門家はインフルエンザの1つの型である限り、ウイルス感染の根絶はあり得ない、普通のインフルエンザのレベルで変異株が生き残り、絶滅せずに思い出したように流行の年があったりする。感染症レベルで言えば今の第2類から第5類に移り、一般のクリニックで取り扱うこともできる。つまりウィズコロナの状況にあるという。中国では0コロナ政策が続いており、4月24日現在、上海市は1か月以上にのぼるロックダウン状態にある。監禁状態にある市民とロックダウンを実践する当局との衝突が続いている。民主主義と権力主義。私たちは民主主義を守る立場にある。その機能的な不備については改善する必要があり、その要求もひっ迫している。しかし権力主義に組するものではない。習近平は武漢でのロックダウンの成功が忘れられず、人口が2倍に達する上海でもそれを実行した。しかし政策的失敗は明らかであり毎日2万人ぐらいの感染が続いている。彼は今年開催される共産党大会までどうしても失敗を認めず、この政策を続けるのだろうか。人権無視のこの考え方にも限界がある。世界の流れはウィズコロナ。経済再生の為、規制の解除を進めている。その大きな潮流は中国も無視できないはずだ。コロナは撲滅するものではなく、賢く共生するものであることは私たちは学んだ。ただ中等症から重症だった感染者の後遺症の問題は残っている。早く治療薬の開発をし、後遺症に苦しむ人々を救済することを忘れてはいけないと思う。



2022. 4. 25

## ～南国土佐を後にして～

### 第3回 「神戸編」

小学校へあがる前後の遊び場はもっぱら路地。家と家との間に狭い路地、棟と棟の間には少し幅のある路地が、それぞれ蟻の巣の如く、縦横に走っていた。路地はもちろん舗装されておらず、地道。子どもはそこで缶けりやおにごっこ、ビー玉、縄跳びなど色々な遊びの場所としていた。何しろTVも何も無い時代、娯楽と言っても何も無い。何も無いから自分たちで遊びを作る。自転車の車輪のタイヤもチューブもないリムの部分を棒で押し込んで前に進める。パイナップルの空き缶にヒモを通して高下駄のようにして遊ぶ。一体何が楽しかったのだろう。子どもたちはそれでも十数人であるいは2~3人で日が暮れるまで遊びに熱中し、日没を恨んだものだ。やがて夕食の時刻になると家々から「〇〇ちゃんごはんやで~帰っておいで~」と母から声がかかる。しぶしぶ遊びをやめて「さようなら。」「またな。」「アバヨ。」など声を掛け合って家に帰った。毎日毎日路地には子どもたちの歓声があり、笑い声や時には泣き声が満ちていた。戦後が色濃く残っていた時代。大人たちはその日暮らしの中で苦心惨憺していたのだろうけれど、子どもたちはいくらかひもじい思いをしながらも、どうにかなるのだろうと思って気楽に遊んでいたのである。服は着た切り雀状態の子が多かったが、割合洗濯がされていた。特に不潔感が強かった訳ではない。ただ栄養が足りていないので鼻たれの子が多く、その子達の袖口は拭いた後でテカテカに光っていた。

路地の話に戻る。二ヵ月程の間隔で汲み取りの日というのがあった。家々では汲み出し口にそれぞれバケツ一杯の水を用意する。専用のトラックが町の中央に停車し、作業員が分担して1人、10軒程の便所にたまりにたまった汚物を柄杓の大きいので汲み取り、桶の中に入れ、前後にぶらさげて天秤棒にして運び出し、車の後ろにかけられた木製のハシゴの様なものの上を昇ってタンクに流し込む。はしごが上下にゆらゆらゆれて桶の中の汚物がタップして道路に落ちることもあり、それはもう…。子ども達はあらかじめその日を知っているので暗黙のうちにグループになって町を脱出する。隣接の町へ避難するのだが、行き先の子どもたちが「来るな、来るな」と大騒ぎする。結局はガキ大将同士が話をして入れてもらうのだが。とにかく1日、いや、翌日くらいまでは町中に<sup>おわい</sup>汚穢の匂いが充満し、気分の悪い時間が続く。大人たちは平気をつくろっていたが、子どもたちはくさいくさいを連発して何とか気晴らしをしていた。あ、バケツ一杯の水は作業員が汲みだした後、その汲みだし口に思い切って水をかけ、一応きれいにするためのものである。神戸市と言えどもまだ下水が通っておらず、私の記憶では小学校3年生の夏休みに高知へ移住するまでそのような状態であったと記憶している。ほとんどの家はぼっとん便所で家の裏は必ず路地になっていて、例の便の汲み出し口があり、いつも汚穢と生物のすえた匂いがしていた。そんな狭い路地裏も結構な遊び場で迷路のような路地を走り回っていた。小学校に上がってからもそんな路地が半分以上通学路で、鼻歌を歌いながら忍者の如く走り抜け通学するのである。

1954年（昭和29年）二葉小学校へ入学。マンモス小学校で2～3階建てのコンクリート造りだった。校庭には立派な相撲の土俵がありその土俵開きには校名にちなんで名横綱の双葉山が来校して見事な土俵入りを披露したという話。おかげで体育に相撲が取り入れられ、運動会では男子全員、ふんどし一丁で相撲の型を演じるのが恒例になっていた。ちょっと迷惑な話でもある。

入学当時、私は3月生まれだったのでいわゆる「早行き」だった。背の順では前から3番目。一学期中は教科書の内容がわからず苦勞した。成績も今一つ。二学期には何とか普通になったけれど。入学時のことで鮮明に覚えていることがある。1つは入学式の朝。おやじが布団の中で「今日から一年生。章、がんばれよ。」と言って抱きしめてくれたこと。照れ臭かった。入学式前後の歯科検診で何を怯えたのか歯を食いしばって口を開かず、床に転げまわって大泣きしたこと。母も手を焼いたことだろう。校舎の中央付近の廊下に割と大きな梵鐘がぶら下がっており、用務員さんが1日数回鳴らしていた。それはやがてサイレンに代わってしまったが。半年に一度くらいの割合で床のコールタールの塗り替えがあった。乱暴な話だが子どもたちは2～3日コールタールの有機溶剤にさらされるのである。給食は食パンかコッペパン、千切り大根やヒジキ、きゅうりもみ、コロケ、鯨のフライなどが副食としてつく。そして極めつけは米軍から提供された脱脂粉乳。これがまずい。残すと怒られるのだがよくハンカチに包んで棒の先にぶら下げて家に持ち帰った。母は「もったいない。」と言ってそれをグイッと飲んでしまう。年に2回ぐらい「マクリ」と呼んでいた、得体のしれないまずくて臭い液体を飲まされた。これはカイニン草を煎じたもので虫下し。腸の中にいる回虫がこのマクリを飲むことで肛門から出てくる。これは異様な感覚で肛門から白い回虫が出てくる。それを母がチリ紙で先をつまんでずるずると引っ張り出す。20cmもある。それをどう処理したかは知らない。今思い出しても不思議な体験だ。すり傷や切り傷はもちろん、捻挫くらいならすべて赤チンで済ませた。なんとも野蛮な話だが、みんなたくましく優しい人たちばかりだった。



旧神戸市立二葉小学校（現在はふたば学舎）